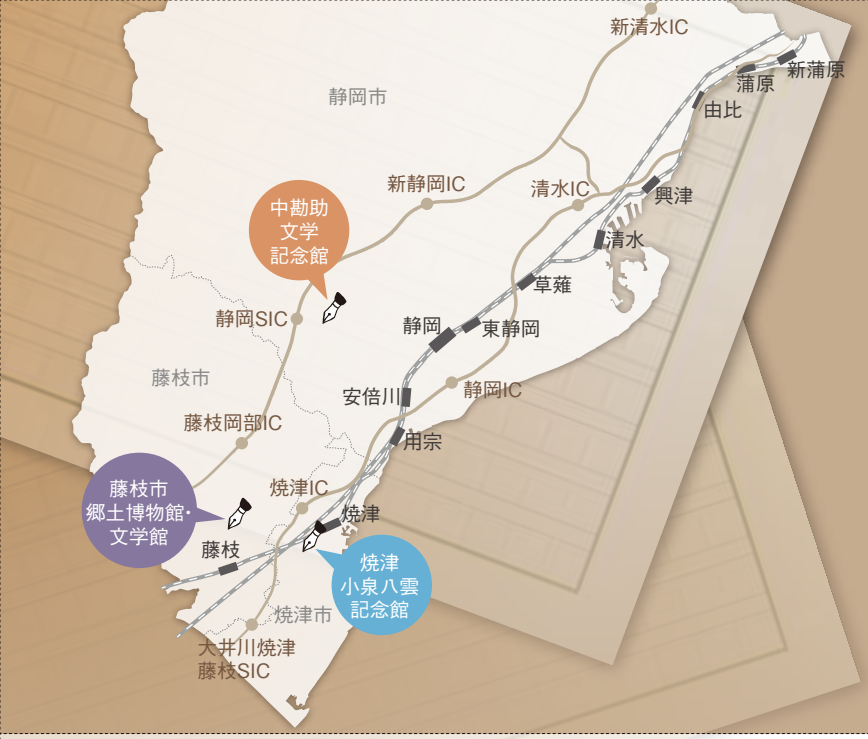
静岡、焼津、藤枝ゆかりの三人の文学者たち

静岡県中部地域は、日本近代文学史に名を残した文学者である中勘助、小泉八雲、小川国夫にゆかりのある地です。

彼らの文学や、それらを育んだ風土を体感するとともに、彼らが生きた明治、大正、昭和の時代に思いをはせながら、文学を通じて静岡の魅力を再発見してみませんか？



中勘助文学記念館

時 10:00 ～ 17:00
休 月曜（祝日の場合は翌日）
年末年始
¥ 無料
住 静岡市葵区新間1089-120
● しずてつジャストライン 藁科線（約25分）
JR静岡駅北口３番線または、静岡鉄道新静岡駅２番線から、「見性寺入口」下車、徒歩４分。駐車場４台有
☎ 054-277-2970

焼津小泉八雲記念館

時 9:00 ～ 17:00
休 月曜（祝日の場合は翌日）
年末年始
¥ 無料
住 焼津市三ケ名1550
● 焼津市自主運行バス（約５分）
JR焼津駅南口４番線から、「文化センター前」下車
☎ 054-620-0022

藤枝市郷土博物館･文学館

時 9:00 ～ 17:00
休 月曜、祝日の翌日、年末年始
¥ 高校生以上200円、
（特別展入館料は別途）
中学生以下無料
住 藤枝市若王子500
● しずてつジャストライン（約10分）
JR藤枝駅北口２番のりばから新静岡方面行乗車、「蓮華寺池公園入口」下車、徒歩10分
☎ 054-645-1100

制作：静岡県立大学 細川ゼミ　発行：2018年９月

するが文学三館めぐり

しずぶん ガイド

静岡・焼津・藤枝の文学に会いに行こう

小泉 八雲

1850（嘉永3）年 ― 1904（明治37）年

Lafcadio Hearn

『怪談』の作者・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）はギリシャに生まれ、渡米を経て、明治時代に来日。晩年、避暑地としてたびたび焼津の地を訪れ、家族とともに海水浴を楽しみました。八雲は焼津の海と人情を愛し、この地を舞台とした随筆「焼津にて」「乙吉のだるま」などの作品を書いています。八雲の幽霊譚「漂流」もこの地で聞いた話をもとに書かれた作品で、焼津小泉八雲記念館には、作品に出てくる「板子（いたご）」の実物も展示されています。焼津は西の松江（島根県）と並ぶ八雲文学の重要な舞台です。記念館には、焼津から妻セツに宛てた愛情あふれる八雲の手紙も展示されています。焼津市内には八雲文学散歩コースも整備され、記念碑や作品ゆかりの地を巡ることができます。

代表作

怪談　1904（明治37）年

『小泉八雲集』上田和夫訳 新潮文庫

「耳なし芳一」「雪女」などよく知られた怪談の他に、焼津ゆかりの幽霊譚「漂流」、「焼津にて」を収録。

中 勘助

1885（明治18）年 ― 1965（昭和40）年

中勘助は、文豪・夏目漱石の推薦で『東京朝日新聞』に連載した自伝的小説『銀の匙』で知られる文学者です。静岡との縁は、1943（昭和18）年～1948（昭和23）年までの4年半、転地静養と疎開のため、妻・和の親戚を頼って、東京から安倍郡服織（はとり）村（現静岡市葵区新間）に滞在したことに始まります。戦中戦後の厳しい時代、服織の豊かな自然や温かい人々との交流は文学活動に影響を与え、この地を題材にした詩歌、俳句、随筆などの作品を多く残し、帰京後も静岡との縁は永く続きました。中勘助文学記念館では、ゆかりの品々を展示するとともに、中勘助夫妻が当時住んだ「杓子庵（しゃくしあん）」も復元され、中勘助の顕彰、文化交流の場として親しまれています。

代表作

銀の匙　1921（大正10）年

『銀の匙』岩波文庫

中勘助の自伝的小説。主人公「私」の幼年期から青年期までを細やかに、品格ある文章で綴った名作。

小川 国夫

1927（昭和2）年 ― 2008（平成20）年

撮影：相田昭

藤枝生まれ藤枝育ちの小川国夫は、自らを「枝っ子」と称する郷土愛の持ち主でした。若き日にフランスに留学し、地中海沿岸をバイクで旅をした体験をもとに、代表作『アポロンの島』を執筆し作家として注目を浴びることになりました。小川国夫の小説は、聖書と欧州体験を題材とした作品をのぞき、そのほとんどが藤枝、焼津、大井川河口域など、郷土である駿河湾西岸を舞台としています。その文学の魅力は、内面を見つめる深い眼差しと人間性を浮き彫りにする凝縮された文体にあります。蓮華寺池のほとりにある藤枝市郷土博物館・文学館には、小川国夫の書斎が蔵書とともに復元され、作品の生まれた空間を体験することができます。

代表作

アポロンの島　1957（昭和32）年

『アポロンの島』講談社文芸文庫

小川国夫の最初の小説集。地中海沿岸をバイクで旅した留学時代の体験を瑞々しい文体で描く。